

「自然体験」が切り拓く温泉の未来

一般社団法人をかしや 代表理事 菊間 彰



2010年開催 鈍川温泉峡エコツアーマツリ

夏の看板プログラム「鈴川渓谷シャワー」  
レッキング」

一つ目は、「シャワートレッキング」略して「シャワトレ」。以前も本誌で紹介したことがある夏の人気プログラムだ。冷たい沢を遡っていく「沢登り」の一種なのだが、鈍川の特徴は水量が少ないこと。

それを逆手はとて開発したのかシリワードレッキングである。鈍川は水量が少なくりスクも少ない。そのため、ウエットスーツなどの重装備が要らず、手軽に体験できるのだ。年齢的にも小学生以上なら参加可能。単価も比較的低く設定できる。こういった敷居の低さは、地域資源を活かしたコンテンツを導入する上で非常に重要なところ。

の低さは、地域資源を活かした

「しまなみ海道」で全国的に有名な今治市の山間部に、その渓谷はある。美しい水と渓相をもつ「鈍川(にぶかわ)渓谷」である。ここは40年前から水質が変わつておらず、その水はどこまでも透き通り、美しい。

渓谷沿いには温泉が沸き「鈍川温泉郷」を形成する。宿と入浴施設合わせて6軒ほどのこぢんまりした温泉街であるが、泉質は素晴らしい。フツ素を多く含み「美肌の湯」として知られている。

私たちちは、この鈍川渓谷を特別な想いを込めて「身近な秘境」と呼んでいる。JR今治駅からわずか30分だが、そこには未体験の自然が広がっているのだ。ここを舞台に、私たちは17年ほど「自然体験プログラム」を提供してきた。今まで様々なメニューを提供してきたのだが、その中から二つほど紹介したい。



シャワトレ！



「動物調査隊に俺はなる！～アニマルトラッキング～」

今年の夏休み、県内外の高校生を対象に、鈍川であるプログラムを実施した。それが「アニマルトラッキング」。動物の糞や足跡、食べ跡などの「痕跡」を頼りに、野生動物の生態を探るプログラムだ。もともとは環境アセスメントなど野生生物調査の手法をプログラムに取り入れたものだ。

参加した高校生は、普段から環境について学んでいて、知識も豊富で環境意識も高い。だがどうしても机上の勉強、知識の習得が中心になりがちだ。それは、フィールドワークの手法と楽しさを知らないから。

私たちは自然体験のプロとして、そんな彼らと一緒にアニマルトラッキングを行った。まずは食痕（食べ跡）や糞を探す。たとえ

松ぼっくりを手でペリペリと剥きながら器用に食べる。その結果エビフライ状の食痕が残るのだ。これを「森のエビフライ」と呼んでいる。生徒たちは目を輝かせながらエビフライを探していた。



森のエビフライ、めっちゃエビフライ！！

私たちの姿を撮影するのだ。  
その蓄積をもとに、小学



動物調査隊のようす



動物調査隊 センサーカメラを仕掛ける

生徒たちは、長年にわたって鈍川でのフィールド調査を続けてきた。センサーカメラを仕掛け、動物たちの姿を撮影するのだ。  
その蓄積をもとに、小学以上のお子さんを対象に「鈍川動物調査隊」というプログラムも実施してきた。動物の痕跡を探し、そこにセンサーカメラを仕掛ける。そして一ヶ月後に回収し、写った動物を確認するのだ。

撮影してきた野生動物の写真や動画をみんなで見る。昼間の森を見るだけではケモノの気配を感じ取ることはできない。多くの動物は夜行性だからだ。しかしながらには、生

き生きとした夜の野生物たちの姿が収められている。初めて見る「野生」に子どもたちは感嘆の声をあげる。こうした「本物の体験」が鈍川では可能だ。

今年北海道で起きたヒグマ問題のように、ヒトと動物の間には軋轢も生まれる。しかしそれを解決するためにも、まずは自然の中に出でリアルな「体験」をし、本当の自然を全身で味わうことが大切なのだ。



センサーカメラに写った野生動物  
うさぎ



センサーカメラに写った野生動物  
シカ

### 自然が切り拓く温泉の未来

豊かな自然は、観光資源となり、環境教育の場となり、また癒しやリトリートの舞台となる。鈍川に限らず、温泉が自噴するエリアはその背後に豊かな自然を抱えていることが多い。手付かずの秘境は身近にあるのだ。

全国の温泉で、宿のつくりやお土産などの「モノ」だけに頼らない、自然体験を通じた「コト」や「トキ」を提供すること。それが温泉の未来を切り拓いていくだろうと、私は考えている。